様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３７５０２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ２３０６０

研究課題名（和文）北琉球方言文法の記述的・理論的研究：非典型的格標示を中心に

研究課題名（英文）Non-canonical case marking: A descriptive and theoretical study of the grammar of Northern Ryukyuan languages

研究代表者
金城　國夫（Kinjo, Kunio）

別府大学・文学部・講師

研究者番号：１０８４７６３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：沖縄本島（与那原町、宜野湾市、金武町）、奄美大島・加計呂麻島（瀬戸内町）の北琉球諸言語・方言の話者を対象に聞き取り調査を行い、特に格助詞ガ・ヌの分布について、これまでの研究で報告されていなかった文構造との関係についての一般化を提示した。具体的には主格助詞ヌの分布が関係節などの埋込文（[太郎が食べた]ごはん）、非意志自動詞文（倒れる」など）といった環境で広くなることなどが明らかになった。研究成果は研究会、学会で報告し、国内の専門誌に論文が掲載された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では北琉球諸語・諸方言を横断的に調査し、これまで指摘されていなかった格助詞の分布と文構造の関係について明らかにした。格と文構造の関係については世界中の様々な言語を対象に分析が行われており、本研究の成果は琉球諸語研究を言語類型論や理論言語学の中に位置付け、琉球諸語の特性を明らかにするだけでなく、人間言語に関する一般理論の発展に貢献するものである。また、調査対象となった北琉球語を含む琉球諸語は消滅の危機に瀕した言語であり、本研究で得られた一次データや文法記述はこれらの言語の保存・継承活動のための資料として活用することができる。

研究成果の概要（英文）：Based on fieldworks in the Okinawa island (Yonabaru, Ginowan, Kin) and the Amami/Kakeroma island (Setouchi), I investigated the distribution of the case particles in Northern Ryukyuan languages/dialects. One of the notable findings that has not been reported in the literature is that the distribution of the nominative case particle, nu, is affected not only by the animacy of the subject but also by the syntactic environment. In particular, nu-marked subjects show wider distribution in relative clauses and non-volitional intransitive clauses. Those findings are presented at several conferences and one journal article.

研究分野：言語学

キーワード：記述言語学　生成文法　格　琉球諸語　沖縄語　奄美語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の開始以前から琉球諸語の格に関する研究は多く行われていた。しかし、与格主語、主格目的語、節全体への格標示など、「非典型的な」格標示や格の交替現象など、言語類型論や理論言語学の分野で盛んに論じられている現象に関して、琉球諸語を対象とした体系的な調査は行われていなかった。

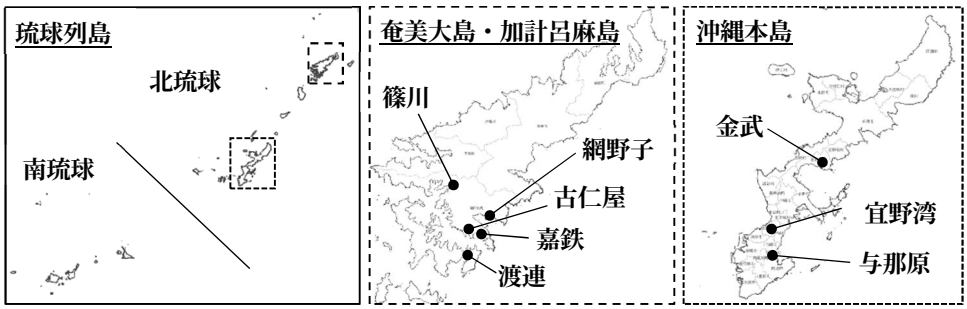
２．研究の目的

本研究は北琉球諸語・諸方言の非典型的な格標示について記述することで、消滅の危機に瀕した琉球諸語の記述研究及び、一般言語理論の発展に寄与することを目的とした。

３．研究の方法

沖縄本島と奄美大島・加計呂麻島で 60 代から 90 代の話者を調査協力者とし、格助詞の分布を明らかにすることを目的とした共通の調査票を用いて聞き取り調査を行った。具体的な調査地は図１の通りである。調査票は調査の進展に合わせ随時追加・調整を行った。また、調査の際は話者本人の同意のもと、一次資料として活用できるよう音声を録音し、音声ファイルを調査ごとに整理・保存した。

図１：本研究の対象とした調査地域



４．研究成果

当初、本研究では日本語やその他の言語で報告されている以下の５つの非典型的格標示について調査する予定であった。

(1) 非典型的格標示

a．主格・属格交替（例：太郎が来た道　太郎の来た道）
b．対格・主格交替（例：太郎は肉を食べたい　太郎は肉が食べたい）
c．主格・与格主語（例：太郎には三味線は弾けない）
d．示唆的目的語標示（目的語の意味特性などに応じて特殊な格標示がなされる現象）
e．節の格標示（例：[太郎が来たかどうか]が問題だ）

しかし新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、調査の回数や時間が制限されたため、このうち成果が得られたのは(a)属格主語と(b)主格目的語に限られる。(c)に関してはいくつかの方言で調査を行うことができたが、与格主語は確認できなかった。(d)に関しては、対格助詞を持たない（ゼロ格標示）沖縄本島方言では調査を行っていない。対格助詞を持つ奄美方言ではゼロ格とバ格の対立に関して若干の調査を行うことはできたが、先行研究の記述を確認するにとどまり、新たな発見には至っていない。(e)の節全体に対する格標示については十分な調査を行うことができず、今後の研究課題としたい。

以下では(a)、(b)に関する研究成果を報告する

4.1 主格・属格交替（ガ・ヌ交替）

多くの琉球諸語では主格助詞としてガ・ヌが用いられ、その選択は主語の有生性によってなされることが従来の研究で指摘されていた。その際参照されるのは「有生性階層」という名詞句の階層で、下位に属する名詞ほどヌ標示がされやすいとされる。本調査でもこの階層に基づいて調査票を作成した。

(2) 有生性階層

１人称＞２人称＞３人称代名詞＞人固有名＞親族目上＞親族目下＞人普通名詞＞動物＞無生物

本研究では、日本語の主格・属格交替（ガ・ノ交替）で見られるような、主節・関係節といった文構造の影響が北琉球語のガ･ヌの分布においても見られるかどうか調査を行った。その結果、調査対象としたすべての方言で、ヌ主語の分布が主節よりも関係節で広いことが確認された。以下、奄美大島古仁屋方言のヌ主語分布および関連する例文を掲載する。

表１　奄美語古仁屋方言における ga/nu の使用領域

主語の有生性		1/2 代名	3 代名	人固有名	親族目上	親族目下	人普通	動物	無生物
主節	Ga								
	nu								
関係節	ga								
	nu								

(3) 主節（古仁屋）

a. *utuutu=ga/nu* *udu-ta* （親族目下）

弟= NOM踊る-PST

「弟が踊った」

b. *arï=ga/*nu* *udu-ta* （３人称代名詞）

あいつ=NOM 踊る-PST

「あいつが踊った」

(4) 関係節（古仁屋）

a. *utuutu=ga/nu* *udu-ta-n* *tuhoroo* （親族目下）

弟= NOM踊る-PST-ADN 場所

「弟が踊った場所」

b. *arï=ga/nu* *udu-ta-n* *tuhoroo* （３人称代名詞）

あいつ=NOM 踊る-PST-ADN 場所

「あいつが踊った場所」

この方言では、主節において目下の親族（弟）までに限られていたヌの使用が、関係節においては３人称代名詞まで広がっている。こうした関係節におけるヌ主語分布の広がりが調査したすべての方言において観察された。

さらに本研究では動詞の種類とヌ主語の関係についても調査を行った。その結果、他動詞節よりも自動詞節で、さらに自動詞節の中でも意志自動詞節よりも非意志自動詞節でヌ助詞の分布が広いことが、調査したすべての方言で確認された。以下に奄美大島嘉鉄方言のデータを掲載する。

表２　嘉鉄方言 動詞の種類別に見た nu の使用領域

		1/2 代名	3 代名	人固有名	親族目上	親族目下	人普通	動物	無生物
主節	他動								
	意志								
	非意志								
関係節	他動								
	意志								
	非意志								

(5) **主節、他動詞節（嘉鉄）**

a. *utuutu=ga/*nu mut□i=ba ka-da* **（親族目下）**

弟=NOM **餅**＝ACC **食べる**-PST

「**弟が餅を食べた**」

b. *an mjaa=ga/*nu nïdin=ba ka-da* **（動物）**

あの 猫＝NOM **ねずみ**=ACC **食べる**-PST

「**あの猫がねずみを食べた**」

c. *koo=nu mïdï=ga/*nu iwa=ba kjoo-cha* （無生物）

川＝GEN 水=NOM 岩＝ACC 壊す-PST

「川の水が岩を壊した」

(6) **主節、意志自動詞節（嘉鉄）**

a. *utuutu=ga/*nu udu-ta* **（親族目下）**

弟＝NOM **踊る**-PST

「**弟が躍った**」

b. *myaa=ga/nu nïgï-ta* **（動物）**

猫＝NOM **逃げる**-PST

「**猫が逃げた**」

c. *nïtï=ga/nu nïgï-ta* **（無生物）**

熱＝NOM **逃げる**-PST

「**熱が逃げた**」

(7) **主節、非意志自動詞節（嘉鉄）**

a. *utuutu=ga/nu toorï-ta* **（親族目下）**

弟＝NOM **倒れる**-PST

「**弟が倒れた**」

b. *mma=ga/nu toorï-ta* **（動物）**

馬＝NOM **倒れる**-PST

「**馬が倒れた**」

c. *kamï=ga/nu kjoorï-ta* **（無生物）**

甕＝NOM **壊れる**.PST

「**甕が壊れた**」

4.2 主格目的語

日本語では可能述語文や願望述語文など一部の状態述語文において主格目的語が見られる（例：太郎は英語が話せる、太郎はごはんが食べたい）。先行研究ではこのような主格目的語は沖縄本島方言には見られないことが報告されていたが、本研究の調査では奄美方言の一部の方言で主格目的語が見られることが確認された。具体的には、主語の有生性、節の種類ごとに表３のような調査票を作成し調査を行ったところ、主格目的語の使用に関して表４のように二つのグループに分かれることがわかった。なお、不定節の人物目的語文は自然な文が提示できなかったため調査票から外した。また調査によっては無生物目的語文の述語として「Y を話せる」を使ったところもある。

表３　主格目的語調査票概略（X＝人、Y＝無生物）

	主節	関係節	条件節	不定節
人物	X を雇える	X を雇える店	X を雇えれば	-
無生物	Y を弾ける	Y を弾ける人	Y を弾ければ	Y を弾けて

表４　主格目的語　グループ A（篠川、嘉鉄、網野子）

	主節	関係節	条件節	不定節
人物	×	×	○	-
無生物	×	×	○	○

主格目的語　グループ B（渡連、古仁屋）

	主節	関係節	条件節	不定節
人物	×	×	○	-
無生物	○	○	○	○

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 金城國夫	４．巻 1
２．論文標題 沖縄語金武方言における格助詞ガ・ヌの分布	５．発行年 2020年
３．雑誌名 第160回日本言語学会大会予稿集	６．最初と最後の頁 307-312
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 金城國夫	４．巻 45
２．論文標題 北琉球語における主格助詞ga/nuと節のタイプ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 琉球の方言	６．最初と最後の頁 71-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 金城國夫
２．発表標題 沖縄語金武方言における格助詞ガ・ヌの分布
３．学会等名 日本言語学会第160回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 金城國夫
２．発表標題 琉球諸語における格交替現象―ga/nuの記述を中心に
３．学会等名 第50回九州方言研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 金城國夫
２．発表標題 琉球諸語における格交替現象―ga/nuの記述を中心に
３．学会等名 沖縄外国文学会第36回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 金城國夫
２．発表標題 北琉球方言におけるガ・ヌ交替と文構造
３．学会等名 日本方言研究会第113回研究発表会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関